

〔書評〕 炯眼による生の断層撮影
——新訳『特性のない男』第一卷（加藤二郎・訳、松籟社）——

早 坂 七 緒

「ウルリヒ⁽¹⁾は、奴が必要だと思ってもいないことばかりを、一生懸命やる男だ！」——かつて自分がそんな風に評されたことを思い出した主人公は、こう思う。「今日では俺たちみんなに、そういうことが言えるのではなからうか。」（二九章「正常な意識状態の説明とその状態の中断」）

時は一九一三年。ウルリヒは三二才、大学教授の息子でウィーンとおぼしき大都会の「小宮殿」のような家に独り住む男である。従僕が一人いるだけで、ときたま色情狂の発作に襲われるまま訪れる裁判官夫人、ボーナデアがいるだけだ。主人公はこれまで軍人→エンジニア→数学者と「デューダ」した経歴がある。それぞれ相当の情熱を注ぎ、成果も挙げたのだが、今は「人生から一年間の休暇をとって」いる。

ひところ流行った言い方にしたがえば「モラトリウム人間」とレッテルを貼って片付けることもできそうだ。ただし「モラトリウム」が文字どおりに優柔不断な「引

き延ばし」しか意味しないのならば、レッテルとしては不十分で、いろいろと補足説明が必要となろう。たとえば、次のシーンから、彼の強靱さを押さえておきたい。

ウルリヒは「何をしたらって構いはしない。こんなにいろいろな力がつれあった中では、人のすることなどまるで問題になりはしない」と考えながら、通りすがりに化粧室に懸っているパンチングボールに激しい一撃を加える。「それは、運命を甘受した状態とか弱気の状態では、とても出せないような一撃だった。」（二章「特性のない男の家と住まい」）

◇ ◇ ◇

「特性のある」父親のあり方を見れば、いくぶんか「特性のない」男の理解に役立つだろう。まじめに、ぬかりなく出世して貴族の身分まで拝受した老法学教授はウルリヒが貴族の宮殿まがいの家を建てたことに腹を立てる。「彼の人生に対する根本感情が傷つけられたのである。この根本感情とは、（……）いわば個人を超越し

た普遍的な利益に対する深い愛情だった。」ここではむしろん、世襲貴族や身分制に対する畏敬の念を想起すればよい。

だが筆者は、あまり偏差値の高くない某私立大学に奉職して八年、一人一人は好きではないが学生たちを愛し、大抵は尊敬できないが同僚諸氏を誇りに思い、下らないスローガンを掲げているが全体として我が大学は良くやっていると、まあ、表面的には思いながら、日々教育と雑務に《誠実に》取り組んでいる自分を言いあてられたような気がした。先程の引用を続けよう。

「それは利益を生み出させてくれるものに対する誠実な敬意であり、それも利益を得るからではなくして、その相手と共存共栄するからなの」だ。「血統正しい犬にしても、足蹴にも動ぜず食卓の下に居場所を求めるではないか。それは犬の卑屈さのためではなく、愛情と誠実さとに由来する。ましてや人間の場合、利益をもたしめてくれる相手や関係に深甚なる敬意と愛情を感じることができるよう、適当に按配された人間にくらべれば、冷静に計算するものたちは、人生でその半分ほどの成功もおさめられないのである。」(三章「特性のない男にも特性のある父親がいるということ」)

◇ ◇ ◇
「特性」の獲得は、現実世界への帰依と、そして現実

世界の正当性の認知とかかわっているらしい。「金儲け以外のあらゆる事業に」耐えうる才能を持ち、しかも金儲けしなくてよい、という羨むべき境遇にあるウルリヒと違って、筆者などはいつのまにか肩書き付きの凝固した市民となりおおせざるを得なかった、ような気がしている。この筆者の何とも釈然としない生活が、またしても言いあてられている。

「結局のところ、人生も半ばに達すると大抵の人は、自分が一体どうして現在の自分になったのか、つまり、今の自分の満足感、世界観、妻、性格、職業、成功などを持つに至ったのか、それがもう分からなくなっている。だが一方では、今ではもう大して変りようがないのだという感情ももっているのである。彼らはだまされたのだと主張することもできるだろう。なぜなら、すべてはなるようにしてなったのだという充分な根拠をどこにも見いだせないのだから。(……) 人生の出来事は、彼ら自身に由来するものはごくわずかで、大抵は赤の他人の気紛れや生死などに左右されていた」のである。

そして人生の半ばに、不意に「我こそはお前の人生だ」と要求する何物かがひょっこり現われ、ひとびとはそれと気づかずにこの男を「養子にするわけだが、この男の経験が今では彼らの特性のあらわれのように思われるようになり、この男の運命が彼らの功績とも悲運ともな

る。」まるで蠅と蠅取り紙のように、「それは彼らを、ここでは彼らの纖毛を、かしこでは彼らの動きをという具合に、しっかりとつかまえて、次第に彼らを丸め込み、ついには厚い覆いの中へと埋め込んでしまうので、彼らは本来の姿とは似ても似つかないものになってしまう。こうなると彼らは、何か抵抗力のようなものが自分の中にあつた青年時代を、ただぼんやりと思い出すばかりだ。……」(三四章「熱い放射と冷却した四方の壁」)

ほとんど『凡庸化の原理』と名付けたくなるプロセスは、長編の導入部にあたるこの第一巻のあちこちに描かれている。筆者が最近ときおり聞いている気になっていることがある。若い世代がこんな言い方をしているのだ。「六十年代の全共闘のようにバリケード封鎖をやってみたい気もするけど、今見てみると、やってた人たちも大人しく会社で管理職やつたりしてるし、ね。」

中年の凡庸を先取りするような若者はこの小説には描かれていない。

「天地開闢以来、たいていの人はその青年時代には転覆の味方だった。年長者が現状維持に汲々とし、頭脳を使わずに心臓という肉片で思考するのを滑稽だと感じていた。(……)若者の自明な道徳とは、行動、英雄主義、革命の道徳だった。ところが彼らはそれを実現すべき年令に達すると、もうそんなことは覚えていないし、知る

うともしない。」(十一章「最も重大な試み」)

◇ ◇ ◇

ここでありふれた世代論を展開する気はない。ただ、筆者には六十年代の異様な昂揚と、今世紀初頭、一九〇〇年台の活気を帯びた開花期^②とは、どこか重ねあわせることができるような気がするのだ。当時は、「突如ヨーロッパ全土に、燃え立つばかりの熱狂が巻き起こった。何が起っているのか、誰にもはっきりとはわからなかった。新しい芸術なのか、新しい人間なのか、新しい道徳なのか、または社会の変革なのか、誰にも断言できなかった。……」(十五章「精神の革命」)二十代の青年にとってはいつの時代でもそう感じられるものなのかもしれないが、やはり特別な何かが息づく時代としての六十年代、今世紀初頭というものを、次の一文からも感じとれないだろうか。

「もつれ合う信条の藪の中を、何かが吹き抜けていった。それは、(……)開墾し道を拓く聖なる良心、最もよい時代のみが知るような小さなルネッサンスと小さな宗教改革のようなものであり、当時人生に足を踏み入れると、すぐその最初の曲角でこの精神の息吹を頼に感じたものである。」(十五章「精神の革命」)

一八八〇年生れのムージルの世代、今世紀初頭に二十代だったウルリヒ、ヴァルター、ディオティーマ達が、

小説ではその「精神の革命」から約十五年後の世界を舞台として登場しているのだ。「本当に世界が悪くなってしまうのか、それとも人がただ歳をとっただけなのか」わからないが「何かが失われた」時代に生きている点で、六十年代を体験してきた団塊の世代と共通するものがあるのではなからうか。

「ずっと以前から、彼がすることや体験することのすべてに嫌悪の翳がさしていた。それは無力と孤独の影であり、普遍的嫌悪であって、それを忘れさせる嗜好は何物にも見いだすことができなかった。ときおり彼は、自分がまるで現代では何の使い道もない才能を持って生まれてきたような、そんな気持ちになるのであった。」(十六章「ある不思議な時代病」)

◇ ◇ ◇

《テエベス百門の大都》にも比すべき巨大で複雑な小説、「特性のない男」の門の一つをくぐるため、「精神の革命」の時代の香りを記憶に留める世代の共通性を鍵として、筆者はアプローチを試みた。次に引く《カカーニエン》の描写は、もはや平成の日本と重ね合わせることはできないかもしれない。もしこれまでの筆者の苦心の案内で読者が「入門」を済ませているなら、もはや卑近な例で確かめる必要もないだろう。

「この国では同胞に対する嫌悪が連帯感情の域に達し

ていたばかりではない、自分という人間とその運命に対する不信の念が、深い自己確信の性格を帯びてもいた。(……) この国では、考えていることとはいつも違った(……) 行動をし、あるいは行動とは違った考え方をしていた。……」(八章「カカーニエン」)

昨今のウイーン・ブームで喧伝される、旧奥太利・班牙利二重帝国(カカーニエン)の洗練されたノンシャランズ、諦念と享楽の混じった国民性が哀惜の念とともに詳述されるこの章の末尾では、「住民の性格」を規定する九つの性格について語られる。それらは規定するともにも彼らを分解してもいるのだが、作者ムージルはさらに「満たされない空間、という受動的空想」としての第十番目の性格について語る。

「この性格は人間に一切のことを許しはするが、ただ一つのことだけは許さない。すなわち他の、少なくとも九つある性格がすること、それらのために起こることをしたがって換言すれば、人間を満たすはずのものを、本気でうけとることだけは許さないのである。この空間は当然描写困難なものだが、(……) 眼に見えない虚ろな空間であり、そこでは現実が、ファンタジーが去ったあの小さな積み木の都市のように、ぼつねんと立っている。」(八章「カカーニエン」)

このあたりに、最も暴力的な作家」と呼ばれるム

ーシルの片鱗がある。色の塗られた木片||積み木は、ファンタジーが作用すればこそ生気を帯びて輝く。手近な《幸福》の最大量を獲得すべく眼をかがやかせて参加する、現実世界という公共の遊技場の夢から覚めたものには「現実」はファンタジーの去ったあとの積み木の都市のレベルにまで貶められ、忘れられた遺跡のように放置されるのだ。「志向性」があつてはじめて現象がある、というフッサール等の考えも、無論認められる③。認識論、感情の心理学など、当時の最新の学問レベルを踏まえた考察も、第二巻以降に登場するだろう。

そしてまた、「体験が人間から独立して」しまつて「空中に浮遊」している世界、「体験するもののいない体験の世界」のさなかで、誰でもわずかな手間と暇で、あるいは小金で、あるいはただ歳をとるだけで、我が身に体験できることを体験したからといって、とても幸せになれるような人々が、温かく突き放されている傾向もこの作品にはある。

だが、現実が積み木の都市にたとえられるとき、逆に生気を帯びる領域がある。それこそがこの長編の中心テーマなのだ。

◇ ◇ ◇
「今日では、観劇の夕べや音楽会や礼拝式のような内面世界の表出のすべては、普通の意識状態の合間に一次

的に押し込まれる第二の意識状態の、現われてはまた消える島々と同じものなのだ。」(一九章「正常な意識状態の説明とその状態の中断」)

この島々にたとえられる第二の意識状態、「別の状態」こそ「太古に沈んだ大陸の名残なのかもしれない」とウルリヒは考え、遙かな探索の旅に赴く。やがてその旅は「忘れられていた」双子の妹、アガートと二人きりで過ぐす庭で、「ある夏の日の息吹」を浴びつつ、降りしきる花びらの葬式の中、突然の作者の死とともに中断する。

リオタールは《ポスト・モダン》とは「メタ物語り」に対する不信感であると規定する④。精神の弁証法、理性的人間、労働主体の解放、富の発展、等の、倫理・政治・科学を裏付け、支えるべき「大きな物語り」が崩れたあとで、「正当性は一体どこに存するのか?」——リオタールのこの苦渋に満ちた状況把握を、明らかにムーシルは先取りしていたし、おそらく少なからぬ点で人類の未来の認識に先行してさえるだろう。

導入部の「第一巻」は、何よりもわれわれの現実の生のいかがわしさ、あやうさが、そして空虚が挟りだされる部分でもある。炯眼による生の断層撮影、と呼んできたのもそのためである。(了)

註

1. 「特性のない男」の主人公。ローベルト・ムージル(1880～1942)作のこの未完の大作は一九六四年に新潮社から、一九六五年に河出書房から翻訳出版されている。前者は高橋義孝ほか七名、後者は加藤二郎氏ほか二名の訳者による難事業であった。すでに「麒麟」創刊号で加藤氏が触れておられるように、原典批判の問題などあり、後半部は河出書房版の方が新編集「特性のない男」(原書)に近くなっていた。また、新潮社版は半ば以上は秀れた翻訳であっても、無視できぬ割合で支離滅裂な訳文が含まれており、ムージルのためにも残念な出来といわねばならない。今回の加藤氏の個人全訳が、瞠目すべき偉業であることは、以上の事情からも推察できることであろう。章ごとの註は、多くはアルンツェンの注釈書によるが、加藤氏独自の手になるものも少なくない。何よりも訳文が、——副詞一つの解釈でがらりと意味が変ってしまう、油断のならない原文だけに——従来ほけていたピントが合うように、明瞭である。

2. 一九〇〇年、クリムトの「哲学」パリ万国博で金賞。フロイト「夢判断」、シュニッツラー「輪舞」。〇一年、クリムトの「医学」のため国会論争、ブルックナー「第九交響曲」。〇二年、ホフマンスタール「チャンドス卿の手紙」、ウィーン市電公営化。〇三年、マラー演出「トリスτανとイゾルデ」初演。ヴァイニンガー「性と性格」。などなど。(紙数

のため後略)

3. Fellmann, Ferdinand: Phänomenologie und Expressionismus. Vlg. Karl Alber GmbH, Freiburg/München 1982. 邦訳「現象学と表現主義」木田元・訳、岩波現代選書 1984. 参照。
4. Lyotard, Jean-François: La condition post-moderne, Paris, Les éditions de Minuit, 1979. 邦訳「ポスト・モダンの条件」小林康夫・訳、書肆風の薔薇 1986. なおリオタールは本文・註を含めて三度、Bouvéresse の著書からの引用の形でムージルの「特性のない男」に触れている。